

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤研究室 (大島) e-mail:mihosma@chikyu.ac.jp

〒603-8047 北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



鞍馬の火祭り (10月22日、鞍馬寺)

<http://www.kyoto-np.co.jp/kp/koto/himatsuri/kurama/>

オーストラリアの野生イネ遺伝資源調査

石川 隆二 (弘前大学)

オーストラリアの野生イネ遺伝資源調査

石川 隆二 (弘前大学)

8月21日からのオーストラリア調査ではノーザンテリトリー準州の主都であるダーウィンを中心として回った。工業開発省局長マリー・ハード氏の案内で準州の管轄下にある遺伝資源、生態芸術局の公園野生生物サービス (Department of Natural Resources, Environment and the Arts, Parks and Wildlife service, Northern Territory Government) の植物標本館 (Herbarium) のイアン・コビー氏からオーストラリアに生息する野生イネについて説明を受けた。オーストラリア大陸ではオリザ属 4 種 (ルフィポゴン, メリデイオナリス, オーストラリエンス, マイニュータ) が採種され、標本化されている。ただ、記載事項に基づいて分類が進められていることから、多年生ルフィポゴンは葯が 3.5mm 以上、3mm 以下の葯を持つものがメリデイオナリスになるというように分けられている。分類基準と遺伝的分化については今後の調査によって、生態と分子標識による明確な基準が必要となる。

著名な進化学者の名前を冠した大学であるチャールズ・ダーウィン大学 (CDU)、熱帯サバンナ共同研究センターにおいてはペニー・ワーム博士とオーストラリアにおける野生イネ集団の生態的な研究について情報を得た。牧草としての利用のためにアフリカから持ち込まれたパラグラスによって野生集団が競合状態にあるという。生態系の攪乱が最も顕著に表れる孤島での現象だろう。開拓される大陸として、オーストラリアで試されたものとして栽培イネの導入もあげられる。1950年代には南半球の雨期(12-4月)に湿原となる **Windows on the wetland** に栽培イネ (品種不明, 確認中) が導入された。州をあげての大プロジェクトとして、機械化された農業システムだったという。しかし、収穫期において鳥の食害により大打撃を受けて凍結されたようだ。その話を聞いて、逗留した宿舎の周辺においても騒がしいくらいの鳥がいたことを思い出した。

郊外にある湿原のフォッグ・ダムでは、先住民族出身である野生生物レンジャーから湿原の説明とアボリジニとの生活の関わりについて説明を受けた。彼もここの出身であり、母親からの教えにより野生イネの種子を集めて粉にして食べていたという。この湿原にも4匹のワニ (アリゲーター) がいるという。そういえば遊泳禁止の立て札がいたるところに

あった.



(フォッグ・ダムの大湿原とアリゲーターの生息場所であることを示す立て札)

ここには数多くの鳥が生息し、自然の環境が周囲で暮らすアボリジニの生活と共に維持されている。湿原を調査することで、一部にルフィポゴンを見出すことができた。バグパイプ・ギースが自分の巣にして、羽に種子をつけて拡散しているという。



(フォグ・ダム
でみられた多年生
野生イネ)

湿原から一歩外にでると極度に乾燥しており、小灌木の下部が黒く焼けただれていることに気がつく。アボリジニが火をつけてクール・ファイア(制御された火事)を起こすことで現在の植生が保たれているという。高速道路の周囲の木も、空港近くの雑木林も下半分がやけこげている。下草は少なく、若芽が芽吹いている。これを目当てにワラビなどが集まり、アボリジニの生活を支えているのだ。道路脇の交通事故ではねられたワラビは哀れな例なのだろう。木自体もすべてが枯れる訳ではない。上部の枝からは若芽が芽吹いている。この制御された火事によって野生イネはどのような影響を受けているのだろう。

「湿原の一区画」である“Windows on the wetland”にはこの地区を訪れる観光客のためにビジターセンターが作られている。小高い丘にあるために、50年前の稲作農場のあとや、アリゲーターとイネの宝庫である Marry 川がよく見える。この丘周囲は雨期になると一大湿原となり、高速道路も洪水の影響を受けるといふ。標識により洪水後の道路の位置と水没下の深さがわかるようになっている。この周囲にはメリデイオナリスが集団を作っているというが、いまではただ、パラグラスの枯れ果てた草原と化している。ホオズキの1種とマメ科牧草がみずみずしい緑の葉を呈している。これより2時間程度で世界遺産であるカカドゥ国立公園に入る。

3月の雨期には現地大学との共同研究でカカドゥならびにメアリー川の野生イネ集団の調査を行うことにした。CDUではエアボートを持っているため、湿原地帯においても川においても自由に行動できるという。一日に\$150で借り受けることができるということから、今後の野生イネ調査が楽しみである。最も、カヌーなどの川面からの距離が浅いものではアリゲーターに襲われる可能性があるということから、調査は現地機関との共同が最も安全であり効率的であろう。材料持ち出しは、工業発展省での調印により、正式な許可が下りるといふ。